

# 衣の系譜に関する研究

(第3報) 腰巻の系譜について

古川 智恵子・中田 明美

## Studies on the Genealogy of Clothes (3) On the Genealogy of the Loincloth

C. FURUKAWA and A. NAKATA

### 緒 言

衣生活の中に洋服が定着した今日では、若い女性はもはや“腰巻”は常用しない。しかし禪と同様、明治以前から昭和の中頃まで女性の労働を支えてきたのが腰巻である。腰巻も本来は表着であり、したがって仕事着としても大いに本領を発揮した。その最も代表的なものが海女の衣服や炭坑婦の仕事着であろう。しかし長い歴史の中で次第に下着化され、今日では和服の裾よけ、あるいは長襦袢の代用として使用されている。

本報においては腰巻がどのような変遷を経て今日に至ったのか、その系譜を探究する事を目的とした。

### 方 法

1. 調査期間 昭和58年8月～昭和60年6月
2. 調査対象 腰巻
3. 調査内容 腰巻の系譜
4. 調査方法

(1) 民間の古老を訪問し、腰巻の形態、材質、寸法、構成、着装方法、更にその機能性等について調査し、写真撮影を行なった。

(2) 各地の資料館、百貨店、図書館において調査、文献を調べ、資料を収集し、腰巻のルーツを探り、現代に至るまでの推移について調査考察する。

### 結果および考察

#### 1. 腰巻の系譜

##### (1) 布の発達と腰巻

人間が衣を着用していく過程で禪の次にまとったのが腰布である。織布技術が未発達な時期には布が貴重であり、手織りで織る巾は50～60cmが限度であった。従って、腰をおおう程度の短い腰布が着用された<sup>1)</sup>。しかし、織布技術の発達に伴って長い布を織る事も可能になり、丈の長い腰巻が用いられるようになった。

腰巻及び禪はインド、東南アジア、インドネシア、ミクロネシア等、南方から入ってきたも

ので、北方騎馬民族系の袴と2種類の下着があった<sup>1)</sup>。腰巻を禪ともいうのは同じ機能を果たすという意味からであろう。しかし、後に男性は腰巻をやめ、女性が禪を生理の時以外しなくなると、男性は禪、女性は腰巻、という肌着の概念が定着した。

稲作が始まった頃これに携わるのは主として女であり、前かがみの姿勢が多い作業では腰部を隠す腰巻は女に適していた<sup>2)</sup>。

## (2) 原始時代

原始時代は土偶、「魏志倭人伝」によってその時代の服装を推察する事ができる。縄文時代には獣皮、魚皮、樹皮等を用いた腰衣が一般的な衣服であったと思われる。

弥生時代の服装は「魏志倭人伝」に袈裟式衣、貫頭衣、という記載がある。いずれも無縫であるが、これらは縄文時代の腰衣から発達したものではなく、東南アジア系の水稲耕作に付随してもたらされた新しい様式である。

## (3) 古墳時代

古代になると衣服は上衣と下衣の二部式に分かれ、筒袖の短い上着と男はズボン、女は巻きスカートのような裳をはいている。これは当時の先進文明を貴族が専ら朝鮮半島から輸入したので、装身具や他の生活用具と共に半島に衣服を模したことが知られる。

裳は下半身に一重か二重巻き、紐は左脇で片輪結びにした。丈は足が隠れるゆったりしたものが一般的であったが、厳しい労働に携わる庶民は膝の下あたりまでの短いものを用いたであろう。当時は肌に直接裳を着たようであるが、寒い時期には裳の下に南方系の簡単な腰巻をつけていたと思われる。埴輪にみられる服飾は中流以上のものであり、多くの一般人は前代の袈裟式衣または貫頭衣であり、下半身に腰巻状の布をまとっていたと思われる。

## (4) 奈良時代

我が国の古典である「古事記」<sup>いざなぎのみこと</sup>、「日本書紀」<sup>よもつくに</sup>の中には既に衣服に関する記事を伝えている。「古事記」に伊弉諾尊<sup>いざなぎのみこと</sup>が黄泉国の汚れを筑紫の日向の橘の小門<sup>ひむか</sup>の阿波岐原<sup>あわきほら</sup>の海岸で祓はれる為裸体になって海に浴し給うた時、帯、裳、上衣、禪、冠、左右手纏を投げ給うた、とある。

また、写真1は「古事記」をもとに描かれた天宇受売命<sup>あめのうすめのみこと</sup>である。天照大神が天岩戸に隠れた際に、天宇受売命は天香久山<sup>あめのかぐやま</sup>の日陰<sup>ひかげのかずら</sup>葛を禪<sup>たすき</sup>にかけ、正木の葛を髪にまきつけ、天岩屋戸の前で足拍子おかしく伏せた桶の上に乗って踊を踊った。それも神がかりした状態をあらわして、胸乳<sup>むちち</sup>をあらわに腰にまとった裳の紐<sup>ほと</sup>を押し下げ、女陰のあたりまであらわして踊ったと神話にあるが、古代においては、女陰や胸乳は新しい生命を妊み育てる所であるゆえに生成の原動力とみられていた為で、悪霊や邪気を追い払う力があるとされていた。その為、江戸時代まで山野で狼に出会うと女性が腰巻をとって女陰をあらわすと良いという呪が現実に行なわれていた<sup>3)</sup>。

写真2は櫛名田比売<sup>くしなだひめ</sup>であるが、裳に一枚の領帯<sup>ひれ</sup>を肩にかけており、この姿がそのまま後の海女の仕事着に受け継がれていくのである。

元来「古事記」は元明天皇の和銅5年の撰であって古代伝承の物語を編集したものである為、その物語の中の衣服も時代が奈良以前である事は知られているが、実年代を以て何年前の風俗と決める事はできない。

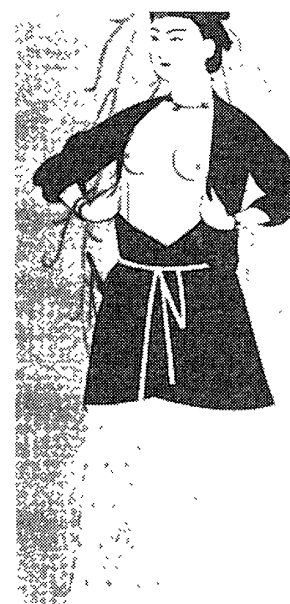


写真1 天宇受売命  
「グラフィック版  
古事記」より

また、養老の「衣服令」によっても当時の服装を知る事ができる。礼服の構成は、宝髻、大袖衣、裙、褶、紕帯、襪、烏に小袖、蔽膝、領帯、天平2年からこれに背子が加わった。この中の裙、褶は下体を包むもので、褶はヒラミ、シビラとも読み、女子の場合は裙の下に重ねる下裙の事で上にはいた裙の裾から少し見えるものである。裙は上古の婦人の裳と少しも異なっていない。結び目は右脇にあった。

これらの文献の記載も中流以上の衣服であり、民間庶民の衣服は大きい変化はみられなかった。

### (5) 平安時代

平安時代初期の女子の服装は、まだ唐制模倣の延長であったが、その後は国風化が進み唐衣装束の女官正装が完成された。この時代の裳は奈良時代の裾の幅が縮小して背後にのみ纏うこととなり、これと同様に緋袴があらわれたのである。

一般庶民の女性は小袖か手無し衣に褶、または小袖着流しに細帯であった。下半身に腰巻をまとっていた者もいた。

この時代、仕事着としての腰巻形態のものに“湯巻”があげられる。湯巻は平安時代の宮中の女房が、天皇の毎朝の洗顔または皇子誕生などの御湯殿の儀に着用した衣で、前掛けのように前方を主として腰をおおうものであったようであるが、その形態は明らかではない<sup>4)</sup>。

平安末期ごろからは女房装束が簡略化され、写真3のように御湯殿奉仕以外の時も袴を省略された形式で着用されるようになった。

### (6) 室町時代

平安時代の貴族社会を背景とした十二単の華やかな風俗であったのに引きかえ、庶民から出た武家の社会に移って世相は大きく転換した。

前時代に內衣として着用されていた小袖が完全に服装の表着として着用されるようになり、女性が袴をはかなくなると下半身を包む肌着の下着が必要となり、湯文字(湯具)が腰肌着として用いられるようになった。昔の風呂は蒸気浴であり、腰を熱から守る為に一枚の布を腰に巻き、後で結んだ。そして手ぬぐいの代わりに使った為にこの名がある。“文字”は女房言葉である。

庶民の女性は普通、小袖着流しに細帯、または小袖に褶、手無し衣に褶をまとった姿であったが、室町末期には前掛けがあらわれて褶に変わった。

この前掛けは当時“前垂”と呼ばれていたが、江戸末期から“前掛け”という名称が多く用いられるようになった。これは裳や褶のように腰全体をまとったものと考えられ、染色には紅が多く、女性の服飾品として発達した。室町末期になると下女、茶屋女達の必需品として用いられるようになった<sup>4)</sup>。



写真2 楠名田比売  
「グラフィック版  
古事記」より



写真3 小袖に湯巻を着けた姿「石山寺縁起」

### (7) 江戸時代

二布……最初は白生地ふたのの短いものであったが、延宝期(1673～81年)の歌舞伎の女形が緋色の二布をして評判になり、それが流行した<sup>1)</sup>4)。二布は二幅の布を横に縫い合わせたものである。

写真4は脚布である。中世に禅家で入浴の時に用いられたが、近世になると上方で庶民も用いるようになり、湯具としてだけでなく日常も身につけるようになった。このように湯具も二布も脚布も同じ下着として用いられるようになり、宝永年間(1704～11年)以降は裸で入浴するようになった為、入浴時の服装が下着へと移行した。

また、二布は日常着だけでなく労働着ともなった<sup>4)</sup>。

写真5は蹴出しであるが、江戸で文化年間(1804～18年)に始まったものである。着物の裾は足が見えないように長くなっていたが歩くと見えてしまうので、それを隠す為に肌着の上に着用された。これは見える事を前提としていた為、染模様のほどこされた縮緬が用いられた。

このように上層階級で開発された蹴出しは庶民にも喜んで受け入れられた<sup>1)</sup>。それは労働する時、あるいは長い旅をする時、着物の裾をまくり上げて下に蹴出しを巻いていけばはずかしくなかったからである。この名残が現代の労働の際の着姿にそのまま受け継がれているのである。この蹴出しは江戸末期に庶民にも長襦袢が普及した為に消滅してしまった。蹴出しは上品なもので表着に準ずるものであった。

室町時代から褶と代わった前垂は、江戸中期まで色は赤に限られ、着用する身分も下女、茶屋女、飯炊、湯女達が用い、赤前垂はそれらの人達の身分をも示す名称となった。地質は仕事の関係上丈夫なものを要し、麻、木綿であったが、中期以降になると文様も施され、染色も華美なものを用いられ、次第に装飾品としての要素も加えられていった。前垂帯といって前垂の紐で着物を締め、帯を締めない着姿も江戸末期町人の間で行なわれた<sup>4)</sup>。

### (8) 現代の腰巻

写真6は現代の腰巻で、上端に白の木綿をつけて腰に密着しやすいようにし、動作時のずれ



写真4 脚布「守貞漫稿」より



写真5 浮世絵にみる遊女の蹴出し(細田栄之筆)

が少ないように紐がついている。写真7は同じ形態であるが、レースの付加価値が加えられている。

写真8は長襦袢を着るのを略して袖と腰巻に同素材を用いた二部式長襦袢である。これは従来の一部式長襦袢に比べて体型によって適合できる柔軟性を持ち、胴部分が木綿になっている為に吸湿性も良く、着やせして見え、暖房設備が整っている今日においては保健衛生上、整容上からも和装において最も適切な肌着である。

この腰巻は“裾よけ”と呼ばれるが、着物の裾さばきを良くする為、裾の折り返しや衿の延長としての折り返しがついていて、全く長襦袢の腰から下半身の仕立て方の通りに縫製されている。裾よけは江戸時代の蹴出しが復活したもので、半襦袢と組み合わせて新しい機能性が加えられている。

図1に腰巻の形態を示した。江戸時代までの腰巻には図1-aのように紐がなく、腰巻の両端

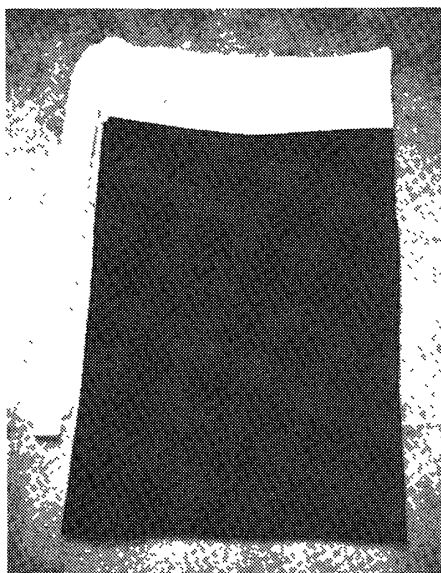


写真6 現代の腰巻

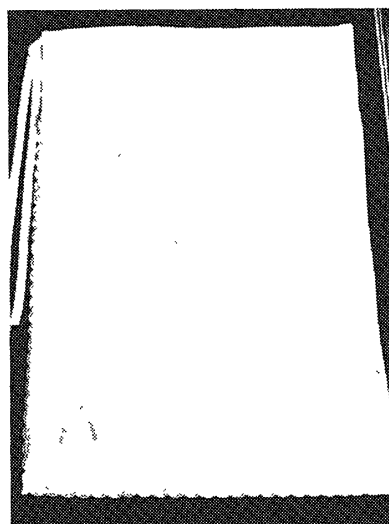
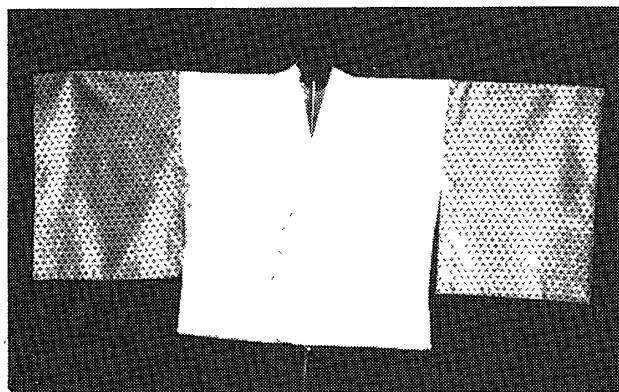
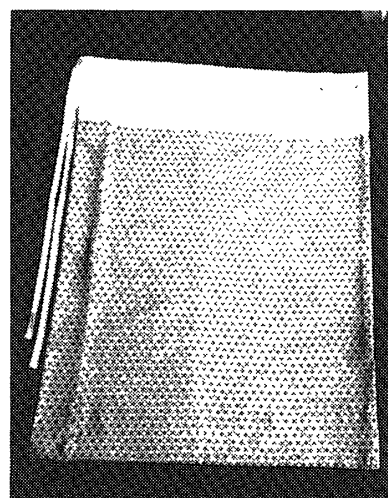


写真7 現代の腰巻（レース）



a 半襦袢



b 裾よけ（蹴出し）

写真8 現代の二部式長襦袢

を内側にはさみこんで着用していた。その後には**図1-b**、**図1-c**のように紐がついて着用しやすくなった。並巾のものは二布、広幅のものは一布に半幅晒の腰布をはぎ合わせた。長さは腰回りの1.5倍位に仕立てた。

以上述べてきた腰巻の系譜を図に示したものが**図2**である。腰巻は原始時代から既に用いられ、裾、褶、湯文字、腰巻等主に女の仕事着、あるいは肌着として何千年もの間引き継がれてきた。これらの衣服は上流社会の衣服の変化に対して時代の底流に残存して今日に至っている。

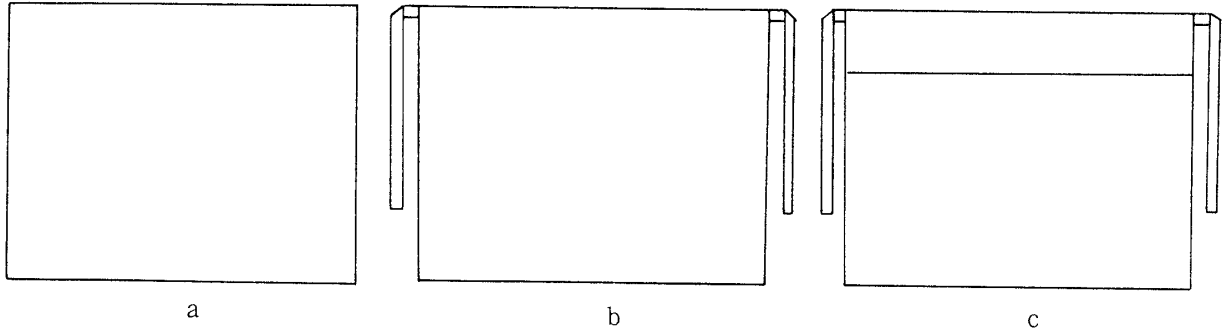


図1 腰巻の種類

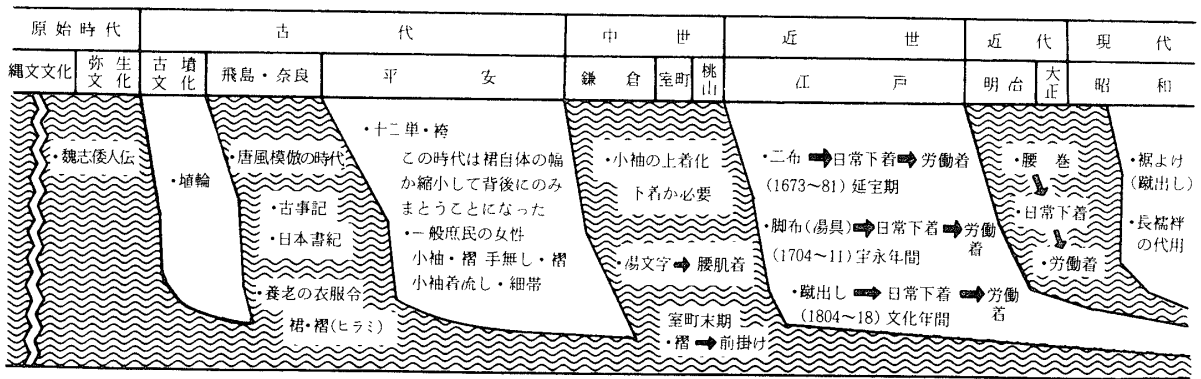


図2 腰巻の系譜

る。

## 2. 仕事着としての腰巻

以上、腰巻の系譜について述べたが、次に腰巻が仕事着として用いられてきた例について述べる。

### (1) 海女の作業着としての腰巻

写真9は大正初期の菅島での海女の“いそなかね”である。膝丈位の天竺木綿の腰巻一つで上半身は裸でもぐった。“いそなかね”は防寒よりもサメよけで身につけたものである。昭和に入ると上衣に“いそシャツ”を着用するようになり、その後昭和43年頃までこれを着用した。

写真10は“たなかね”である。これは普通の腰巻丈、即ち足首までのものであるが、表は布を縦に並べて縞模様の着物の残りぎれ等を二、三種類縫いつなげたものである。海から上がった時、濡れた腰巻の上にこの“たなかね”を巻き、内側から濡れた腰巻をすぽんと足もとにとき落して着がえるのである。これは裕仕立てになっている。



写真9 いそなかね(菅島)大正初期  
朝日新聞より

## (2) 漁村の作業着として腰巻

写真 11 は大正初期の南知多町の地引網作業風景である。これは冬であるが、女の人が長着を短く端折って腰巻をのぞかせている仕事姿がみられる。男は禪一枚の姿がみられるが、男も女も力を合わせて厳しい労働に従事していたのである。



写真10 たなかね（相差）昭和59年12月

## (3) 農村の作業着としての腰巻

写真 12 は農村における腰巻姿である。写真 12-a は甘藷を運搬する婦人であるが、ツッポの上半衣に腰巻、前掛け姿である。室町末期にあらわれた前掛けが労働服飾として今日まで引き継がれているのである。また、写真 12-b は田植姿の早乙女であるが、紺緋の長着を端折って緋の腰巻をのぞかせている。これは色彩的にも美しい着装である。



写真11 地引網作業（南知多町）大正初期

## (4) 炭坑婦の腰巻

写真 13 は炭坑での厳しい労働に腰巻一枚で命をはって従事する炭坑婦である。炭坑婦の腰巻は足の動きを妨げない為、膝上の短い丈で、脇にスリットが入っている。炭坑では、生きる糧をつかむ為に夫婦が協



a 甘藷の運搬風景 昭和18年



b お田植の舞 昭和48年

写真12 農村の仕事着としての腰巻

力して危険と戦いながら労働に従事していた。男は禪、女は腰巻、という着装形態の最も顕著な例である。

## (5) 腰巻姿でのサンドスキー

写真 14 は昭和 8 年～10 年頃の南知多町でのサンドスキー風景である。当時は半襦袢と腰巻姿(蹴出し)で女性がスポーツを楽しんでいた。

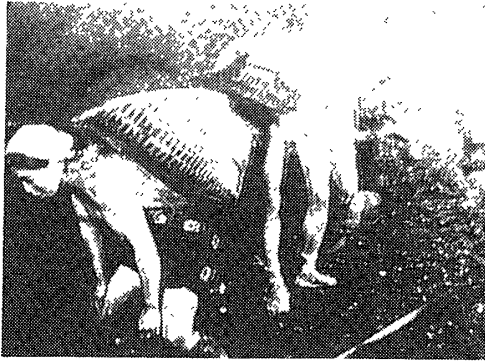


写真13 炭坑婦の腰巻

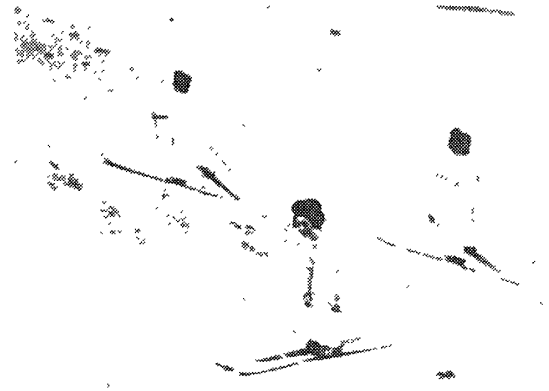


写真14 サンドスキー（南知多町）  
昭和8～10年頃

以上、労働着としての腰巻は、いずれの場合も膝丈までの短い丈に上部で調整して装着している事がうかがえる。

腰巻の機能性は次報で述べるが、腰巻も褌と同様、厳しい作業に従事する女達の労働を支え見守り続けてきたのである。

## 要 約

腰巻は褌と並んで衣の原点であり、ある時代には裳として表着に、また褶・湯巻として労働着に、あるいは肌着に、またある時代には脚布や蹴出しとして女の服飾に色彩を添え、下半身を被う必要不可欠な「衣」として人間の欲求の多様化と共に分化してきた。

また、労働着としては漁・山村あるいは地底でも炭坑婦に用いられ、厳しい労働に従事し、家族の為に身を粉にして働く女達の精神を支え、見守ってきたのである。

この腰巻は昭和の中頃まで、あるいは地域的には現在でもなお仕事着として用いられ、和服着用時の裾よけとしても用いられている。

人間の文化は原点に戻りながら循環を繰り返してきたが、そこには絶えず新しい価値と機能が加えられ、時代と共に脈動しながら発展してきた。

今日まで何千年もの間その形態を保ち続け、着用され続けてきた腰巻は、労働文化の荷ない手として堂々と主張すべき貴重な文化財であり、人間の進歩、発展と共に分化し、育成をみてきた生活と文化の尊い資産なのである。

## 参 考 文 献

- 1) 深作光貞：「衣」の文化人類学，71～84，107～170，PHP 研究所(1983)
- 2) 樋口清之：続日本風俗の起源 99 の謎，148～150，178～179，産報(1976)
- 3) 鈴木 勤：グラフィック版古事記，20～23，130～133，世界文化社(1977)
- 4) 服装文化協会：服装大百科事典 上，292～293，314～315，下，350～351，433，469，470，文化出版局(1981)
- 5) 大濱徹也：生活文化史，4，21～26，雄山閣(1984)
- 6) 相馬万里子：生活文化史，4，33～39，雄山閣(1984)
- 7) 山名邦和：日本衣服文化史要説，7～32，関西衣生活研究会(1983)
- 8) 古川智恵子・中田明美：名古屋女子大学紀要，31，1～12(1985)